

# 奈良時代語における助辞ケリと助辞ケム

小 出 祥 子

キーワード：奈良時代語 万葉集 ケリ ケム

## 1. 問題の背景

助辞ケリは、特に平安時代語文法において、過去のテンスに関わると考えられ、助辞キと対照してその差異を記述されることが多い<sup>1)</sup>。

それに対して、ケリを「過去」と切り離して捉えようとするものもある。例えば、西大寺本金光明最勝王経平安初期点を調査した春日（1942）は、以下のように述べる。

（以下、下線、二重下線、囲み線は全て筆者による）

この古點に見えるケリは、時に於ては過去でなく殆ど皆現在に用ゐられてゐる。

（中略）

さてケリといふ語は上代の文獻について見るに、過去と解しても通過し得る例はむしろ少い。記・紀の歌謡はもとより、萬葉集の歌、古事記・宣命等の假名書きされてゐるこの語を検して見るに、皆さうである。自分は元來この點に大きな疑問をもつのであつて、ケリは原義が過去ではなく、少くも過去のやうに用ゐたのはむしろ二次的の意義ではなからうかと思ふ。（pp.240-243）

また、鈴木泰（2000）（2004）は、ケリをテンスではなくムードを表す形式として捉えている。

ケリは本来、それまで予想していなかった事実に気づいたことを表すものである。気づくとは、そこで新たに認識が成立することだから、ケリ形の表す意味は、〈認識の成立〉のムードといってよいだろう。認識の成立とは、まさに現在のことであり、とりあげられる出来事は過去のことで、現在のことで、また運動でも、状態でもかまわないので、結果として基本的にケリ形はテンスからもアスペクトからも解放されている。つまり、ケリ形は時間を表す形式ではなく、ムードを表す形式であると考えるべきだと思われる。

鈴木泰(2004) 「テンス・アスペクトを文法史的にみる」(p.168)

本稿の対象は奈良時代語であるが、筆者も、奈良時代語のケリは、過去のテンスに関わらないと考える。例えば(1)(2)では「今日」「今」という語句が共起しており、春日(1942)の指摘する通りである。

(1) 梅の花手折りかざして遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり (家布尔志阿利家利)  
(磯部、天平2年1月13日、05/0836)

(2) 昔こそ難波田舎と言はれけめ今は都引き都びにけり (都備仁鷄里)  
(藤原宇合、03/0312)

ただし、用例によれば、ケリの意味機能について、春日(1942)や鈴木(2000)(2004)の見解をそのまま用いることもできない。春日(1942)は、「ケリは過去から動作が継続して現在に存在することを表すのを原義と考える」(p.244)と述べるが、(1)は、その理解に当てはまらない。また、鈴木(2004)は「ケリ形の表す意味は、〈認識成立〉のムード」(p.168)と述べるが、例えば(3)のケリは、〈認識成立〉のムードとは理解できない。

(3) 我が里に今咲く花のをみなへし堪へぬ心になほ恋ひにけり (尚戀二家里)  
(10/2279)

ケリに前接している句は、「我が里に今咲くおみなえしの花に、耐え難い思いをしてなおも恋している」という内容であり、「恋ひぬ」という事態は以前から認識されている。既に認識が成立しているような事態にもケリは関わる。

次に、助辞ケムも、過去と関わる助辞として考えられてきた形式である。ム・ラム・ケムというム系助辞の機能は、(未来)推量・現在推量・過去推量と理解されてきた。しかし、筆者の調査によれば、ム系助辞は、テンスの違いを前提とする推量形式ではない可能性が高い。例えば、現在推量を表すとされるラムが出現する構文上の位置は、過去を表すとされる助辞キと共通する点が多い(小出(2012))。

(4) 富人の家の子どもの着る身なみ腐し捨つらむ絹綿らはも  
(山上憶良、天平5年6月3日、05/0900)

(5) 焼津辺に我が行きしかば駿河なる阿倍の市道に逢ひし子らはも  
(春日老、03/0284)

(6) あさもよし紀人羨しも真土山行き来と見らむ紀人羨しも  
(調首淡海、大宝元年9月、01/0055)

(7) くへ越しに麦食む子馬のはつはつに相見<sup>し</sup>子らしあやに愛しも

(東歌、14/3537)

(4)(5)は、愛惜の対象を修飾する位置にラムとキが出現する例であり、(6)(7)は「羨し」「愛し」等の感情の対象を修飾する位置にラムとキが出現する例である。愛惜も、「羨し」「愛し」も、通常、実在するものに対して起こる感情である。キがその対象を修飾する位置に現れるのは、過去に実在し現在は無くなってしまったものに対して、これらの感情は起こりやすいためだと考えられる。それに対して、ラムを現在推量とする見方からは、この分布を説明することができない。ム系助辞を奈良時代語の文法体系に位置づけるためには、テンスや推量とは異なる文法カテゴリーから捉え直すことが必要である。

以上のような問題意識から、本稿では、万葉集を用い、奈良時代語の助辞ケリとケムの意味機能を再検討したい。

## 2. 助辞ケリ

(表1) 助辞ケリの出現環境

活用形		出現数
終止形ケリ	<u>一ケリ</u>	<u>179</u>
未然形ケラ	<u>一ケラシモ</u>	<u>20</u>
	<u>一ケラシ</u>	<u>16</u>
	<u>一ケラズヤ</u>	<u>4</u>
	<u>コソーケラシキ</u>	<u>1</u>
連体形ケル	<u>一ケルカモ</u>	<u>50</u>
	<u>一ケルカ</u>	<u>3</u>
	<u>ゾーケル</u>	<u>70</u>
	<u>連体形終止</u>	<u>3</u>
	<u>カ(モ)一ケル</u>	<u>4</u>
	<u>ヤーケル</u>	<u>3</u>
	<u>一ケルモノヲ</u>	<u>6</u>
	<u>一ケルヲ</u>	<u>1</u>
	<u>一ケルコト</u>	<u>3</u>
	<u>準体句末</u>	<u>1</u>
	<u>連体修飾</u>	<u>18</u>
已然形ケレ	<u>コソーケレ</u>	<u>16</u>
	<u>一ケレド(モ)</u>	<u>2</u>
	<u>一ケレバ</u>	<u>6</u>

万葉集のケリの出現環境を、活用形および接続形式によって整理すると、表1のようになる。

出現する位置は、406例中、369例が文末である(表1中の下線のある例の合計)。また、文中の場合も、バ節やド(モ)節等、文に近い独立性の高い従属節末に現れる。連体修飾用法は18例に過ぎず、ケリ全用例の4%程度である。ケリは典型的には文末に使用される助辞だといえるだろう。

本稿では終止形終止のケリを考察対象とする。それは他の助辞が後接しない環境にあるケリを観察することで、ケリの機能をより明確に記述したいと考えるからである。

終止形のケリが文末に使用される場合、その 8 割程度の例において、ケリで言表される事態と併せて別の付帯的事態も言表されている（表 2）。例えば以下のようである。

- (8) 雨隠り心いふせみ出で見れば春日  
の山は色づきにけり（色付二家利）  
 （大伴家持、天平 8 年 9 月、08/  
 1568）

ケリで言表された事態「春日の山は色づいた」と共に、「雨が続いて気持ちがうっと  
 うしいので外に出て見る」という事態が言表されている。

このようなケリ句事態と、ともに言表される事態との意味的關係に注目し、ケリの意味機能を考察する。

（表 2）終止形ケリの構文構造

一。一ケリ。（2 文で構成される）	33
一バード（モ）一ケリ	4
一バーケリ（一ミ）	47
一ド（モ）一ケリ	15
一ミ（ミ語法）一ケリ	11
一ヲ（逆接）一ケリ	4
一ケリ一ナク（ニ）	3
一テ一ケリ	11
一ニ一ケリ	5
一ツツ一ケリ	2
一ユ一ケリ	2
その他	4
1 文のケリ	38

## 2. 1. ケリ句の原因・理由が言表されるもの

- (9) み吉野の岩もとさらず鳴くかはづうべも鳴きけり（諾文鳴来）川をさやけみ  
 （10/2161）
- (10) 東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり（宇倍戀尔家利）  
 （門部王、03/0310）
- (11) しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色づきにけり（色付尔家  
 里）  
 （10/2196）

この形式では、ケリ句に、眼前の状況や詠み手自身の心情が言表される。それとともに、もう一方の句で、その原因・理由が述べられている。(9)は、「み吉野の岩元を離れず鳴くかえる。なるほど鳴くはずだ。川がすがすがしいので」、(10)は「東の市の植木の木が垂れるまで長い間あっていないから、なるほどこれ程に恋しい。」の意味である。(9)(10)では「うべ(なるほど、道理だ)」とあることから、「カエルが鳴いている」という事態や「恋しい」という心情自体にすでに詠み手が気づいていたことは明白である。また、「うべ」が記されない(11)についても、同様に捉えることができる。ケリ句の表す「真木の葉が色づいている情景」は眼前にあるため、詠

み手は既に認識している。それはなぜかこの情景の原因を探ったところ「時雨が絶え間なく降ったからだ」という原因理由を見つけたわけである。このような詠み手の認識過程は、原因理由とともに現れるケリ句すべてに当てはまる。この型のケリ句は、詠み手が既に知っていた事態について、その原因理由を見いだしたことで、改めて言表された事態であるということができる。

鈴木泰（1997）はこれらの例を「再認識」として位置付ける。「再認識」とは「出来事を、新たな地平にもたらし、て認識しなおすことを表す。」(p.180)と説明され、(9)(10)は「原因の認識」＝「すでに気づいていることであるが、なぜ起こっているのか分かっていないことについて、そうなるのが道理であると納得できる原因を見いだすことを表す。」(p.182)例として挙げられている。ただし、本稿は「原因の認識」という特徴は、ケリの中心的意味に関わるものではないと考える。2.2以降で例を挙げる通り、「原因」以外の事態がケリとともに述べられることも多く、「原因の認識」という特徴はケリの本質に関わらないと考えられるためである。ここで確認したのは、ケリ句の表示する事態が、予め詠み手の知っていた事柄であり、それが改めて認識されて言表されたという認識の過程である。

## 2.2. ケリ句と因果関係の成り立たない事態が言表されるもの

- (12) ますらをや片恋せむと嘆けども醜のますらをなほ恋ひにけり（尚戀二家里）  
（舍人皇子、02/0117）
- (13) 忘れ草垣もしみみに植ゑたれど醜の醜草なほ恋ひにけり（猶戀尔家利）  
（12/3062）
- (14) いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色づきにけり（色付尔家里）  
（10/2197）
- (15) かくのみにありけるものを妹も我れも千年のごとく頼みたりけり（憑有来）  
（大伴家持、天平11年6月、03/0470）

これらの例は、ケリ句で詠み手の心情や眼前の状況が述べられ、もう一方の句でケリ句とは因果関係の成り立たない事態が言表されている。

(12)は、マスラオであれば片恋などしないと嘆く事態に反して、やはり自分は恋焦がれてしまう心情を詠んだものである。(13)は、恋心を忘れるという忘れ草を垣こびしりと植えたが、やはり自分は恋焦がれてしまうという内容である。どちらも、

「なほ（やっぱり）」とある通り、ケリ句が表す「恋ひぬ」は、以前から認識されていたことがわかる。ただしそれは詠み手にとって受け入れがたい事態であるため、否定するために「マスラオは片恋などしないと嘆いた」や「忘れ草を植えて恋を忘れるように頑張った」のように事実を述べる。しかしやはり何度確認しても「恋ひぬ」という事態は変わらない。そのような事態にケリは接続する。

(14)はケリ句に「なほ」等の副詞は現れない。しかし、認識の過程は(12)(13)と同様である。「大城の山は色づきぬ」という事態は眼前に存在しており、詠み手には確実に認識されている。

(15)は「こんなにも儚くなってしまう運命だったのに、妻も私も千年も生きられるつもりで頼みにしあっていた」の意である。ケリ句で表されるのが、現在ではなく過去の事態であるという点で上3例とは異なるが、認識過程としては次のように説明できる。ケリ句「妹も我れも千年のごとく頼みたり」は詠み手自身の経験である。ただし、お互いに元気である間は改めて意識することはないだろう。しかし、妻が亡くなった現在において、改めて意識され言表されたのである。

以上、この型で表されるケリ句も、詠み手は既に認識していた事態であった。その事態と因果関係の成り立たない矛盾した事態に遭遇することで改めて詠み手の意識に上り、言表されている。

填

### 2.3. ケリ句を認識する契機が言表されるもの

- (16) 雨隠り心いふせみ出で見れば春日の山は色づきにけり（色付二家利）  
（大伴家持、天平8年9月、08/1568）
- (17) 家に来て我が屋を見れば玉床の外に向きけり（外向来）妹が木枕  
（柿本人麻呂、02/0216）
- (18) 天の川水蔭草の秋風に靡かふ見れば時は来にけり（時来々）  
（柿本人麻呂歌集、10/2013）
- (19) 物思ふと隠らひ居りて今日見れば春日の山は色づきにけり（色就尔家里）  
（10/2199）
- (20) 皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり（諾母戀来）山川清み  
（07/1131）

一般的にいわゆる「気づき」のケリと呼ばれる例である。鈴木泰（1997）が「思

い至り」<sup>ii</sup> (p.176) と呼ぶものも含む。例えば、(16)は「雨で籠っているうちにすっかり紅葉が色づいてしまったという意味」とされ、紅葉という変化が進んでいたことに気づくことをケリが示すと考えられてきた。また、(17)は気づきの例として、「妻を山に葬って帰ってきてから、妻の枕があらぬ方向に向いていたことに気づいたことを歌ったものである」と説明される。

しかし、本稿では、この型でケリが言表しているのは、詠み手が期待したり予想していた事態であることを指摘したい。例えば、(16)で、詠み手は何も考えずに春日の山を見たわけではない。雨に降りこめられて気持ちがうっとうしいので、外に出て山を見たわけである。そこには当然、心が晴れる景色を期待する心情がある。そして、眼前に広がっていた「春日の山は色づきぬ」という景色がケリで言表される。(17)では、枕は主の魂が籠るものとして詠まれている。その枕があらぬ方向を向いているという情景は、主（妻）の魂が抜けた状態、すなわち妻の死を表している。したがって、「玉床の外に向きけり妹が木枕」とは、ただ妻の枕があらぬ方向を向いていたことに気づいたということを表しているわけではない。火葬から帰ってきて、妻の魂がここには無いことを「やはり」という気持ちで確認しているとみるべきである。(18)は、七夕を待つ彦星の気持ちを詠んだものである。彼は七夕の夜を待ちわびているはずであり、「天の川水蔭草の秋風に靡かふ」という情景から、自分の待ちわびている「時（七夕）は来ぬ」ということを知る。ケリが表すのはそのような事態である。(19)は(16)と同様に捉えることができる。物思いにふけて引きこもっていた人物が、外に出て期待する景色は、心の晴れる景色だろう。そのような景色が「春日の山は色づきにけり」と表される。(20)は「皆人の恋ふる」「うべも」とある通り、「吉野というのは恋焦がれるような素晴らしい場所だ」という知識を詠み手は以前から持っている。そして、その景色を「今日見」た結果、期待通りであったことが「うべも恋ひけり」と表されている。

以上のように、従来「気づき」「思い至り」と理解されていた用例は、言表された時点で初めて詠み手の意識に上ったわけではない。詠み手は以前からその事態を期待したり予想したりしており、それが確認されたときにケリが使用されるといえる。

## 2. 4. ケリ句を根拠とする命令・疑問・意思等が示されるもの

- ②1) 雨も降り夜も更けにけり (夜毛更深利) 今さらに君去なめやも紐解き設け  
な (12/3124)
- ②2) 我が舟は比良の港に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり (左夜深去来)  
(高市黒人、03/0274)
- ②3) 帰るべく時はなりけり (時者成来) 都にて誰が手本をか我が枕かむ  
(大伴旅人、神龜5年、03/0439)

これらの例は、ケリ句が他の事態の根拠となるものである。前節までに挙げた例は、他の事態をきっかけとして、改めてケリ句事態を意識し、言表していた。それらに対して、この形式は、ケリ句事態を根拠として命令・疑問等が述べられるため、「ケリ句を認識する→命令・疑問など」のように認識過程の順序が、前節までの例と逆になっているように見える。では、ケリ句にはどのような事態が現れるのか、以下で確認する。②1)は、「雨も降って夜も更けてきた。今更あなたは帰らないだろう。共寝する準備をしよう。」の意味である。男を引き留める女の歌である。おそらく詠み手である女は、恋人が帰れなくなるような事態を待ち望んでいた。そして、その通りに実現した事態がケリで表示されている。②2)は船旅の最中に詠まれた歌である。日が暮れるかどうかは常に気にかかることだと考えてよいだろう。そして、ついに「さ夜更けぬ」という事態となり、ケリで表示されたといえる。②3)は、「都へ帰ることができる時期となった。都でいったい誰の腕を枕に寝ようというのか」の意である。大宰府に赴任中に起こった妻の死を悲しむ歌である。「帰るべく時はなり」という事態は、詠み手にとって待ち望んだ事態であろう。『萬葉集釈注(二)』では、「いよいよ都に帰ることができる時期とはなった。」(p.309)と訳されている。既に妻が亡くなってしまったことと、そうなってから待ち望んだ帰京の時期がやってきたことが詠まれ、亡妻悲傷の歌が構成されている。

これらの例においても、ケリで示される事態は、詠み手にとって、以前から意識されていた事態であり、それが作歌時点において、他の事態との関わりの中で言語化せずにはいられなくなったものだといえる。

そもそもこれらの例で、ケリは終止形で現れており、形式として、命令・疑問・意思の根拠を表しているわけではない。ケリ句が命令・疑問等の根拠となるのは、あくまで解釈の上のことである。仮に、根拠を表す形式にするならば、表1からは



助辞バが想定できる。しかし、ケリの用例が406例ある中で、ケリに助辞バが接続するケレバの用例は6例<sup>iii</sup>しかない。更にそれらも、長歌で伝説が語られる場合に用いられる等、特殊な内容を表す場合が多い。ケリで示される事態は、そもそも形式として、根拠等の複文の前件的要素には適さないといえる。

命令・疑問・意思等の根拠であることは、ケリ句事態の本質的役割でなく、これらの例にあっても、ケリ句には以前から意識されていた事態が言表されている。

## 2.5. ケリ句事態のみで構成されるもの

㉔ 見まく欲り我が待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり (花開二家里) (10/2124)

㉕ 恋しけば形見にせむと我がやどに植ゑし藤波今咲きにけり (今開尔家里) (山部赤人、08/1471)

㉖ 黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするになほ及かずけり (尚不如来) (大伴旅人、03/0350)

㉗ 世の間は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり (加奈之可利家理) (大伴旅人、神亀5年6月23日、05/0793)

これらの例は、ここまで挙げたものと異なり、ケリ句事態以外の事態は言表されていない。しかし、詠まれているのは、前節までの例と同様に、以前から詠み手の意識に上っていた事態であることを指摘したい。例えば、㉔に「見まく欲り我が待ち恋ひし(見たいと待ち焦がれていた)」とある通り、ケリで言表されているのは、詠み手の待ち望んだ事態である。㉕も、「恋しけば形見にせむと我がやどに植ゑし(恋しい時にはあの人の偲び草にしようと庭に植えた)」とあり、ケリで示されている事態は、詠み手に待ち望まれた事態である。㉖は、酒を讃むる歌13首の最後に配置されている。この歌に至るまでに「酔ひ泣き」の境地を何度も褒め、㉖において「なほ(やっぱり)しかず」と述べる。この例も、既に認識された事態が再度確認されている。㉗の作歌背景には、愛妻の死と、大伴宿奈麻呂の死の知らせが重なったことがある。「いよよますます」とある通り、「悲し」という状態は以前からあり、更に新たに「悲し」という状態が重なっている。そのような事態にケリは使用される<sup>iv</sup>。

ケリ句事態のみで構成される例においても、ケリ句事態は以前から詠み手の意識

の中にあり、それが実現したときに、ケリを用いて改めて言表されている。

2.6. ケリの意味的機能

ケリ句事態は、知識や期待、予想として、詠み手が予め意識していたものばかりであった。また、その事態は、既に実現していたものもあれば、詠み手の期待や予想に留まっていた事柄が、言表される時点で実現したものもある。

既に知識にあったり、期待、予想された事柄が改めて言表される時、そのきっかけが存在していることが多く、それらの事態は関連付けて言表されやすい。そのため、ケリ句は、その事態の原因理由や、因果関係の成り立たない事態、また「見れば」等、認識したきっかけとともに言表されることが多いと考えられる。先行研究で「再認識」や「思い至り」と説明されているのは、この現象を捉えたものだと思う。また、期待した事態が実現したり、予想とは異なる形で事態が現れた場合には、何らかの感情が表出されるのは自然である。注釈をする場合において、ケリは「詠嘆」と解釈されることが多いが、それはケリのこのような面を反映したものであるといえる。

3. 助辞ケム

(表 3) 助辞ケムの出現環境

終止	<u>一ケム</u>	<u>10</u>
連体	<u>一ケムカモ</u>	<u>20</u>
	<u>一ケムカ</u>	<u>3</u>
	<u>一ソーケム</u>	<u>1</u>
	<u>一カーケム</u>	<u>28</u>
	<u>一カモ一ケム</u>	<u>7</u>
	<u>一ヤーケム</u>	<u>4</u>
	<u>疑問詞一ケム</u>	<u>7</u>
	<u>一ケムモ</u>	<u>1</u>
	<u>一ケムヤモ</u>	<u>1</u>
	<u>一ケムガゴト</u>	<u>1</u>
	<u>一ケムモノヲ</u>	<u>1</u>
	<u>連体修飾</u>	<u>37</u>
已然	<u>一コソーケメ</u>	<u>3</u>

次に、助辞ケムについて考察する。万葉集のケムは表 3 のように現れる。

124例中、37例に連体修飾用法が現れる。連体修飾用法が約30%を占めており、その割合はケリと比較すると高い。その理由を明らかにすべきではあるが、本稿ではケムの終止形に注目し、分析を進めるため、今後の課題としておく。文末に使用される例が多い傾向は、ケリと同様である。

### 3.1. ケム終止形

ケムの終止形は以下の10例のみである。ケリと同様に、ケム句がどのように詠み手に認識された事態であるのかという点から考察するが、用例数も少ないため、全ての例について、順に記述する。

- (28) うましものいづく飽かじ尺度らし角のふくれにしぐひ合ひにけむ (四具比相尔計六) (児部女王、16/3821)
- (29) 玉津島儀の浦廻の真砂にもにほひて行かな妹も触れけむ (妹觸險) (柿本人麻呂歌集、09/1799)
- (30) 鶏が鳴く東壮士の妻別れ悲しくありけむ (可奈之久安里家牟) 年の緒長み (大伴家持、天平勝宝7年2月8日、20/4333)
- (31) いづくには鳴きもしにけむ (鳴毛思仁家武) 霍公鳥我家の里に今日のみぞ鳴く (大伴家持、08/1488)
- (32) 真木の葉のしなふ背の山しのはずて我が越え行けば木の葉知りけむ (木葉知家武) (小田事、03/0291)
- (33) 門立てて戸は閉したれど盗人の穿れる穴より入りて見えけむ (入而所見牟) (12/3118)
- (34) 我が岡のおかみに言ひて降らしめし雪のくだけしそこに散りけむ (藤原夫人、02/0104)
- (35) 御園生の百木の梅の散る花し天に飛び上がり雪と降りけむ (雪等敷里家牟) (大伴書持、天平12年12月9日、17/3906)
- (36) 春霞春日の里の植ゑ小水葱苗なりと言ひし枝はさしにけむ (柄者指尔家牟) (大伴駿河麻呂、03/0407)
- (37) 妹らがり今木の嶺に茂り立つ夫松の木は古人見けむ (古人見祁牟) (09/1795)

(28)は、素性の高い美男子の求婚を断り、素性の低い醜男と結婚する女性を嘲った歌である。ケム句事態「尺度らし角のふくれにしぐひ合ひぬ(角の太った男とくっついた)」というのは、詠み手は予め聞き知っていた。しかし理解できなかったためその理由を考えたところ、「うましものいづく飽かじ(素敵なものと思ったら、どこをとっても飽きないのか)」という考えにいたり、改めてケム句を言表したといえる。認識のあり方としては、2.1に挙げたケリ句の例に近い。ただし、ケリ

句事態は自身が経験したり、眼前で確認できた事態であったのに対して、②⑧のケム句事態は伝聞によるものであり、詠み手は直接確認できない事態である。

②⑨は、意思等の根拠となるような事態をケム句が述べるものである。2. 4 に挙げたケリの例②⑨等と同様の構文構造である。

②② 我が舟は比良の港に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり (左夜深去来)  
(高市黒人、03/0274再掲)

異なるのは、ケム句は過去の他者の経験という詠み手が確認できない事態を述べる点である。

③⑩は防人が妻と別れる悲しみを詠んだ歌である。2. 1 に挙げたケリの例⑨等と同様の構文である。

⑨ み吉野の岩もとさらず鳴くかはづうべも鳴きけり (諾文鳴来) 川をさやけ  
み (10/2161再掲)

この場合も、ケム句は第三者の心情という詠み手には確認しようのない事柄が詠まれる。

③⑪は、待ちあぐんでいた時鳥が、漸くやってきて鳴いたことを詠んだ歌である。時鳥を待つ間、詠み手は「どこかではもうとっくに鳴いている」と想像したに違いない。その事態を、「今日自分の家の庭で時鳥が鳴いた」という事態をきっかけに、改めてケム句で言表したと考えられる。

③②でケリ句の述べる「木の葉知る」という内容は、他の歌にもみられる。

③③ 天翔けりあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知るらむ (02/0145)

③④ 天雲のたなびく山の隠りたる我が下心木の葉知るらむ (07/1304)

樹木は人の心を知る能力を持つと信じられていた。「杉や檜などが素晴らしく茂りたわむ背ノ山なのに、ゆっくり賞美できずに越えていく」という事態を経験して、「木の葉知る」という事態を改めて認識したと考えられる。ただし樹木に関わる事態であり、詠み手は経験することができない。

③⑤は、以下の④⑩に対する返歌である。

④⑩ 門立てて戸も閉してあるをいづくゆか妹が入り来て夢に見えつる  
(12/3117)

予め話題となっていた「夢に見える」という事態について、どのような方法で実現したのかという回答とともに、改めて「見ゆ」をケム句で言表する。ただし、夢に

見た経験をしたのは相手であり、詠み手は経験することができない事態である。

(34)も同様の認識過程をたどる。

(41) 我が里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後 (02/0103)

に対する返歌である。「我が岡の神に言いつけて降らせた雪のそのかけらが、そこに散ったのだ」と述べており、既に相手との話題となっていた「そこに散る(雪が降った)」という事態がケム句として言表される。このケム句事態も、相手の下で起こっており、詠み手は確認できない。

(35)は、梅花歌32首の八番目の歌に追和したものである。

(42) 我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも (05/0822)

(35)について伊藤博(1998)は「「天に飛び上がり雪と降りけむ」と全面的に肯定することで解答を与えている。霏々として天地に舞う梅の花の極限の美しさを賞でる父の歌境に心から賛同し、夢幻にも近いその世界を確乎として定着させた歌である。」と解説する。以前に話題になった事態について、再度言表する際にケムが使用されている。

(36)は、「植ゑ小水葱」に相手の娘をたとえ、「もう成長して大人びてきたことでしょうね」と呼びかけて、妻にすることを求めた歌である。そのような事情を考えれば、詠み手は相手の娘が成長していることを知っていたと考えるのが自然である。ただし、娘は相手のところにいるため、詠み手は娘の成長を確認することはできない。そのような事態がケムで言表されている。

(37)は、宇治若郎子を偲ぶ挽歌である。故人が命を絶った場所で詠まれた歌であり、今日の前にある松を通して、故人が偲ばれている。松の樹齢を考えれば、故人がこの松を見たことは、想像できる事態であり、今木(=愛しい子の家に今来た)、夫松(=夫の訪れを待つ)の木をきっかけに改めて言表されたと考えられる。

以上、ケム終止形で述べられる事態は、ケリ句と同様に、知識や期待、予想として、詠み手が予め意識していたものばかりである。ただし、ケリ句とは異なり、詠み手が直接確認できない事態に限られる。また、その原因は、時間的距離が要因となることもあれば、空間的距離が要因となることもある。ケムの意味的機能は、過去テンスと本質的に結びついているわけではない。

4. まとめ

以上、終止形のケリとケムに注目し、その意味機能を考察した。その結果、ケリとケムの共通点は、「知識や期待、予想として、詠み手が予め意識していた事態である」ということが分かった。異なる点として、ケリ句事態は詠み手が直接確認できる事態であるのに対し、ケム句事態は詠み手が直接確認できない事態である点が挙げられる。また、ケム句事態は詠み手と時間的に離れた過去で起こっている場合もあるし、距離的に離れている場所で現在起こっている場合もある。

5. 今後の課題と展望

今回の結果を反映し、奈良時代語のム系助辞及びキ・ケリを整理すると、以下のようになる。ラムやキについては、未だ詳細な検討ができておらず、暫定的な整理にとどまるが、便宜的に表に組み入れた。

	現実		非現実
	知識・期待・予想：無	知識・期待・予想：有	
言表時に確認できる事態 (眼前の事態および 自ら経験している事態)	裸の動詞等	ケリ	
言表時に確認できない 事態 (非眼前)	(ラム：空間的距離による) (キ：時間的距離による) <sup>v</sup>	ケム ：空間または時間的距離に よる	ム ：実現していないことに よる

キを過去に関わる助辞とするのであれば、ケリはキと関連の薄い位置に整理される。文法カテゴリーでいえば、キはテンスに分類され、ケリはモダリティに分類されるだろう。しかし、それらの文法カテゴリーは奈良時代語の文法体系に関与的に働いているわけではない。むしろ、発話時点において、ある事態が発話者から確認できるかどうかという条件を重視すべきであろう。

今回の考察では、それぞれの形式の終止形のみを対象とし、その他の形式には全く触れていない。特にケリの連体形修飾の例には、伝承や伝説に関わるものも見られ、今回得た結論の範疇から逸脱する。連体形修飾の用例が非常に少ないこと自体を、ケリの特徴として捉えることもできる。今後の検討課題とする。

注

- i 例えば、細江逸記（1932）は、キとケリの違いをトルコ語の目睹回想と伝承回想の区別に基づいて説明しようとした（p.127）。現在も細江（1932）は、キ・ケリ研究の基本的な先行研究として参照されている。
- ii <気づき>の場合には、文脈からではきっかけが何であるかはっきりしないものもあるが、多くは見るという動作または場所を変えるということをきっかけとして、今まで気づいていなかった事態を認識するのである。<思い至り>の場合は、今直接に認識されている事態がもとになり、それをもとにして、それをもたらしした事態に思い至るという evidential な認識過程が明確に存在する。（鈴木（1997）（p.176））
- iii 09/1740…父母に 事も告らひ 明日のごと 我れは来なむと 言ひければ 妹が言へらく…高橋虫麻呂歌集
- 09/1809…うち嘆き 妹が去ぬれば 茅渟壮士 その夜夢に見 とり続き 追ひ行きければ  
ば後れたる 菟原壮士い 天仰ぎ 叫びおらび 地を踏み きかみたけびて  
もころ男に 負けてはあらじと… 高橋虫麻呂歌集
- 09/1809…懸け佩きの 小太刀取り佩き ところづら 尋め行きければ親族どち い行き  
集ひ長き代に 標にせむと 遠き代に 語り継がむと… 高橋虫麻呂歌集
- 17/3977…葦垣の外にも君が寄り立たし恋ひけれこそば夢に見えけれ 天平19年3月5日  
大伴家持
- 17/4003…冬夏と 別くこともなく 白栲に 雪は降り置きて 古ゆ あり来にければごし  
かも 岩の神さび たまきはる 幾代経にけむ… 天平19年4月28日 大伴池主
- 18/4119いにしへよ偲ひにければ霍公鳥鳴く声聞きて恋しきものを天平感宝1年 大伴家持
- iv 「悲し」にケリが接続する例は萬葉集中でこの1例のみである。「悲しき」や「悲しも」の結ぶのが慣例であった。」（p.124）と伊藤（1998）も述べる通り特殊な例ではある。
- v キヤラムは、愛惜等の感情の対象を表す構文等に共通して現れる。感情が決定されているということは、詠み手はその対象の存在を確信しているはずである。ただし、愛惜等は、目の前のものに対して生まれにくい感情でもある。これらの特徴から、キとラムの叙述する事態に共通するのは「発話者にとって成立が確定している」とことと「眼前にない」ことであると考える。相違点は、叙述事態が眼前にないことについて、時間的距離を要因（キ）とするか、空間的距離を要因（ラム）とするかという点であると整理できるのではないかと予想している。

【参考文献】

- 細江逸記（1932）『動詞時制の研究』（泰文堂）
- 春日和男（1969）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』（勉誠社）
- 加藤浩司（1998）『キ・ケリの研究』（和泉書院）

- 伊藤博（1995－2000）『萬葉集釈注(一)～(十)』（集英社）
- 吉田茂晃（1989）「「けり」の時制面と主観面—万葉集を中心として—」『国語学』157集
- 鈴木泰（1997）「上代語の「けり」の意味」『日本語文法 体系と方法』（ひつじ書房）
- 鈴木泰（2000）「「き」「けり」論の論点」『国文学 解釈と教材の研究』45巻14号
- 鈴木泰（2004）「テンス・アスペクトを文法史的にみる」『朝倉日本語講座〈6〉文法(2)』（朝倉書店）
- 小出祥子（2012）「上代におけるラムの意味的機能について」『日本語学会2012年度春季大会予稿集』pp.87-94

（こいで・よしこ／名古屋短期大学助教）